

だ美
よ術
り館

contents

描かれた女性・天使たち	
市民の愛したもうひとつのヨーロッパ絵画	
—バロックから近代まで	[2~3]
平成21年度新収蔵品紹介	[4~6]
[館長あいさつ] 就任三年目に当たって	[6]
イベント報告	[7]
所蔵品によるテーマ展	[7]
[福井県立美術館もの知り事典③] 島田墨仙をめぐる人々	[8]
福井県立美術館 夏の企画展案内	[8]

表紙：オノリオ・マリナーリ 《聖チエチリア》(部分)



描かれた女性・天使たち

マリアーノ・サルバドール・マエーリャ

《聖家族と幼い洗礼者ヨハネ》

マエーリャ(1739～1819)はスペインの画家。サン・フェルナンド王立アカデミーで学んだあと、ローマでバロック美術を学ぶ。1795年には同アカデミー総長、後に主席宮廷画家となり、マドリッド王宮やトレド大聖堂に代表作が残っている。

当時のカトリック国でしばしば描かれた、幼いイエス、聖母マリア、父ヨセフ、幼い洗礼者ヨハネを主題としている。



EUROPEAN
PAINTINGS

市民の愛した もうひとつの ヨーロッパ絵画

バロックから近代まで

4.29(木・祝)～5.23(日)

休館日：5月10日(月)

主催・会場：福井県立美術館 協力：長坂バロック株式会社

開館時間：午前9時から午後5時まで(入館は4時30分まで)

毎週金曜日は午後8時まで開館(入館は7時30分まで)

観覧料：一般800円、大高生500円、中小生300円

(30名以上の団体は2割引)

身体障害者手帳等所持者とその介護者1名半額

(但し障害者手帳に介護印のある方のみ)

出品予定数：58点

関連行事：●講演会

講師：千足伸行(成城大学教授)

演題：「ヨーロッパ絵画の楽しみーバロックから近代へ」

日時：5月9日(日)

●担当学芸員によるギャラリートーク

日時：5月5日(水)、16日(木)、22日(土) 午後2時～

※本展チケットが必要

同時開催：所蔵品によるテーマ展

「岩佐又兵衛～福井藩御用絵師の軌跡～」

※本展チケットでご覧いただけます。



ルーメン・ボルテンヘン

《古い師》

ボルテンヘン(1608～1649)はオランダの画家。バロック様式の先駆者であるイタリアのカラヴァッジョの影響を受けたユトレヒト派の一人とされる。古い師を主題にした作品は、カラヴァッジョ他色々な画家によっても描かれている。

世紀のヨーロッパ美術はバロック様式と呼ばれ、プロテスタント国のオランダなどでも興隆しましたが、特にスペイン、イタリアを中心としたカトリック系の国々で栄えました。バロック美術の特徴に宗教画が盛んに描かれたことがあります。これは16世紀に起きた宗教改革とそれに対抗する反宗教改革に深い関係があります。というのは、17世紀にはカトリック国では、教会の威信を取り戻すための手段として、宗教の偉大さを宣伝する絵画を制作したのです。本展の展示作品にもそうした宗教的テーマの作品があります。同時に17世紀は、市民階級の地位が高まってきた時代でもあったため、彼らが楽しむことのできる世俗的な絵画も描かれるようになりました。

あわせて本展では、美術史上近代と呼ばれる19世紀に描かれた作品も紹介します。19世紀はクールベなどに代表されるリアリズム絵画や印象派が活躍した時代ですが、これらの流派は当時前衛絵画であり、必ずしも一般市民に愛されたわけではありません。当時の市民に愛された絵画は、しばしばサロンに出品されたような、もっとわかりやすく親しみやすい絵画でした。

本展で展示する13か国の56作家、58作品の中には、ルーベンスなどから技法を学んだと言われている作家の作品もあります。その国で、その時代を生きた人たちがそれぞれの絵を見て感じた喜びを、この「もうひとつのヨーロッパ絵画展」で体感していただきたいと思います。



**チャールズ・
ゴールズボロ・アンダーソン**
《クラーク・トラヴァーズ夫人》

アンダーソン(1865～1936)はイギリスの画家。王立英国芸術家協会会員。ロンドンのロイヤル・アカデミーで学んだ。上流社会の女性や子供の肖像画が数多く残っている。本作品が描かれた1900年頃は、大英帝国の黄金期といわれるヴィクトリア朝時代の最末期。上流社会の婦人と思われる肖像が熟練した筆致で描かれている。



ロベルト・ナドラー
《ヴェネツィア》

ナドラー(1858～1939)はハンガリーの画家。ウィーンの美術アカデミー等で学んだ。1889年にブダペスト美術アカデミー教授になり、1915～23年までブダペストの美術学校の校長を務めた。

光と色彩を追求し、風景画家として高く評価された。ヴェネスの風景を描いた本作品も、光と色彩に満ちており印象派を思わせる作風である。



**エドゥアール＝
ジャン・コンラッド・アマン**
《家族のピクニック》

アマン(1819～1888)はベルギーの画家。ベルギーの美術アカデミーやパリのエコール・デ・ボザールで学んだ。歴史画を得意とし、パリのサロンで何度もメダルを獲得している。オルセー美術館にはアマンの代表作が収蔵されている。

この主題の作品としては、マネの《草上の昼宴》が有名であるが、本作品はマネの20年も後に描かれているにも拘らず、はるかに伝統的な手法で描かれている。

平成21年度

新収蔵品紹介

福井県立美術館では昨年度購入50点、寄贈245点計295点の作品を新しく収蔵しました。これ以外にも、管理替え672点(岡島コレクション)、重要文化財1点(仏涅槃図)の寄託がありました。新収蔵作品は、4月2日(金)～25日(日)の新収蔵品展を皮切りに当館テーマ展として、3回に分けて順次展示していきます。



土田ヒロミ 1.《俗神シリーズ「青森、弘前」



土田ヒロミ 2.《砂を数えるシリーズ「プール、大磯」



土田ヒロミ 3.《パーティーシリーズ「東京」



土田ヒロミ 4.《ヒロシマ・コレクション「ワンピース」



5. 竹内栖鳳 《池畔》



6. 松崎真一 《新巻》

【購入／寄贈】

写 真

土田ヒロミ

《KUシリーズ》から6点

1.《俗神シリーズ》から17点

2.《砂を数えるシリーズ》から15点

《団地シリーズ》から1点

《合わせ鏡シリーズ》から10点

3.《パーティーシリーズ》から10点

《新・砂を数えるシリーズ》から10点

《ヒロシマ1945-1979シリーズ》から10点

《ヒロシマ・モニュメントシリーズ》8点

4.《ヒロシマ・コレクション》から12点

《Ageing》1点

計100点

土田ヒロミ(1939～)は福井県出身の写真家。福井大学卒業後上京しポーラ化粧品本舗に就職。勤務の傍ら東京総合写真専門学校研究科で写真を学んだ。1971年にフリーランスの写真家となる。その後東京総合写真専門学校校長や大阪芸術大学教授などを歴任しながら、写真家としての実績を重ねてきた。2008年から09年にかけて東京都写真美術館と福井県立美術館で「土田ヒ

ロミのニッポン」を開催し、同展により第27回「土門拳賞」を受賞した。

1960年代末から、日本の土俗的な文化、ヒロシマ(原爆)、高度経済成長、バブル経済などのテーマにより、変貌する日本の姿を撮り続けてきた。そのユニークな視点と斬新なスタイルは、写真表現を大胆に切り開き、これまでにない日本の時代と人々を表現している。(来年2月25日～3月27日のテーマ展「写真家土田ヒロミの世界」で全作品を展示予定)

【寄 贈】

日 本 画

5. 竹内栖鳳 《池畔》

1939(昭和14)年 39.0×44.0cm 絹本淡彩

竹内栖鳳(1846～1942)は京都画壇の重鎮で、近代日本画の先駆者の一人。円山四条派の伝統的な写生に西洋画の技法を取り入れ、革新的な画風を創り出した。

鼈(すっぽん)と蛙を描いた本作は、栖鳳の得意とした動物画の一種ともいえるが、一方で箱裏に書かれた文章から、池の友の鼈と蛙が詩歌を語る場面と分かり、軽妙飄

逸な俳画的の小品と捉えることもできる。

洋 画

松崎真一

《蝗A》

1951(昭和26)年 160.7×130.0cm 油彩、カンバス

6.《新巻》

1947(昭和22)年 117.2×73.0cm 油彩、カンバス

《松》

制作年不詳 147.3×112.3cm 油彩、カンバス

《闘鶏》

1950(昭和25)年 114.5×162.0cm 油彩、カンバス

《軍鶏》

1975(昭和50)年 114.5×162.0cm、油彩、カンバス

松崎真一(1910～1969)は福井市生まれの洋画家。独立美術協会の会員として活躍する一方で、福井県における戦後の洋画の振興にも貢献し、数多くの展覧会や美術グループを組織した。作風は具象から抽象まで幅広いが、敬愛した師である須田国太郎の影響で鳥を主題にした作品も多い。



増田孝

《兄妹》

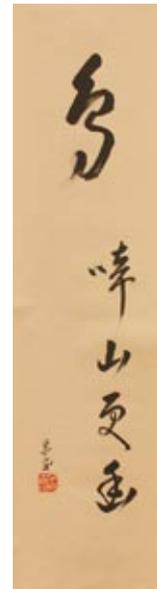
1968(昭和43)年 116.7×80.3cm 油彩、カンバス



7. 増田孝 《微風》



8. 十五代大西清右エ門 《朝鮮風炉》



12. 十五代千宗室
《一行書「鳥啼山更幽」》



9. 初代魚住為楽 《砂張建水》



10. 五代三浦竹泉 《色絵南蛮船図水指》



11. 楠部弥一 《井戸茶鉢》

7.《微風》

1995(平成7)年 116.7×90.9cm 油彩、カンバス

増田孝(1936~1997)は旧武生市生まれの洋画家。二科会に所属して作品発表を重ね、評議員、北陸支部長などを歴任した。また長年金沢美術工芸大学で教鞭をとり、後進の育成にも尽力した。

作風は、人物、風景、静物と幅広く、明るい色彩と軽妙な筆致で、わかりやすく心をなごませる作品が多い。

工 芸

8. 十五代大西清右エ門 《朝鮮風炉》

不詳 29.0×30.5cm 唐銅、鉄、銀

十五代大西清右エ門(1924~2002)は京都生まれの釜師。千家十職の一家で代々釜師をつとめる十四代大西清右衛門の次男で、1960年に十五代清右衛門を襲名した。

風炉(ふうろ)は夏期間に席中で釜をかけて湯を沸かす茶道具の一種である。



9. 初代魚住為楽 《砂張建水》

不詳 7.8×14.5cm 銅、錫、鉛

魚住為楽(1886~1964)は石川県生まれの金工家。砂張は銅に錫と鉛を加えた合金で、製造には高度な技術が必要とされる。為楽は長年その技術を研鑽し、1955年には銅鑪で重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された。建水は茶道具の一種で、席中で茶碗をすすいだ湯水を捨てるのに用いる器物である。



10. 五代三浦竹泉 《色絵南蛮船図水指》

不詳 16.0×14.5cm 磁器

五代三浦竹泉(1934~)は京焼(清水焼)の窯元四代三浦竹泉の長男として京都に生まれた。1972年に五代竹泉を継承。現在京都伝統陶芸家協会会長。

本作は、京焼独特の優雅な色絵を継承し、昔ながらのオランダ風俗の意匠を参考にしながら、現代風にアレンジしている。



11. 楠部弥一 《井戸茶鉢》

不詳 8.0×14.8cm 陶器

楠部弥一(1897~1984)は京都市に生まれの陶芸家。「彩甌」という独特の技法を開発し、1978年に文化勲章を受章した。朝鮮陶器に触発された本作は、伝統を消化して

自身の美意識を確立させるため、生涯にわたって試行し続けた弥一の陶芸表現の結実の一つといえる。



十五代千宗室

《茶杓(銘:福寿)》

不詳 19.0×1.1cm 竹

12.《一行書「鳥啼山更幽」》

昭和50年代 105.0×28.5cm 紙本墨書

十五代千宗室(1923~)は、茶道裏千家十四代家元淡々斎宗室の長男として京都市に生まれた。1964年に裏千家第十五代家元となり千宗室を襲名。1997年に茶道界初の文化勲章を受章し、2003年に嫡男に家元を譲り、以降千玄室を名乗る。

茶杓は煤竹製で、利休の創始といわれる中節の形をとり、節上には樋があり、節裏をわずかに削り込んでいる。作者自身が「福寿」という銘を付けている。一行書は、中国・宋時代の魏慶之(ぎけいし)の著『詩人玉屑』(しじんぎょくせつ)の一篇「風定花猶落 鳥啼山更幽」(風定まって花なお落ち、鳥啼いて山更に幽なり)を典拠とした語句である。

13. 山本雅堂 《書「天の香具山」》

1992年 175.0×36.0cm 紙本、六曲一隻屏風



13. 山本雅堂 《書「天の香具山」》

山本雅堂(1932～)は福井県の生まれで県内に在住しながら活躍中の書家である。日展をはじめ、若越書道会展や千草会などさまざまな団体展で作品発表を重ねている。現在福井書人連盟会長や読売書法展理事などを務める。

本作は、第60回千草展に出品された作品で、万葉集の中の舒明天皇の長歌が書かれている。

童画



14. いわさきちひろ《かるた原画》

14. いわさきちひろ 《かるた原画45点》

紙、水彩

遠藤てるよ 《絵本等原画57点》

紙、水彩

駒宮録郎 《絵本原画16点》

紙、水彩

黒崎義介 《絵本原画2点》

紙、水彩

深澤虹子 《絵本原画1点》

紙、水彩

太田大八 《絵本原画1点》

紙、水彩

堀 文子 《絵本原画1点》

紙、水彩

林 義雄 《絵本原画26点》

紙、水彩



14. いわさきちひろ《かるた原画》

鈴木寿雄 《絵本原画1点》

紙、水彩

鈴木未央子 《絵本原画15点》

紙、水彩

須田 寿 《絵本原画2点》

キャンバス、油彩

谷岡俊夫 《絵本原画1点》

キャンバス、油彩

谷口健雄 《絵本原画3点》

キャンバス、油彩

渡辺三郎 《絵本原画2点》

キャンバス、油彩

脇田 和 《絵本原画3点》

キャンバス、油彩

富永秀夫 《絵本原画1点》

キャンバス、油彩

作者不詳 《絵本原画3点》

キャンバス、油彩

日本でもっとも著名な童画作家といわれているいわさきちひろのかるた原画や、幼児を叙情的に描く生活童画家遠藤てるよなど総数180点。そのほとんどが1950年代から60年代にかけて描かれたもので、絵画としても質の高い童画原画コレクションであり、極めて貴重なものといえる。(本年7月24日～8月22日のテーマ展「子どもたちの情景 ～絵本原画の世界～」で全作品を展示予定)

【館長あいさつ】

就任三年目に当たって

福井県立美術館館長 齊藤 和紀



月日の経つのは早いもので、館長に就任してから三年目に入りました。

私はもともと事務系の職員ですので、自分にこのような大役が務まるのだろうかとは最初は不安に思ったものです。全国的美術館長会議などに出席して、対面した館長が絵の大家などであったりすると気が引けてしまうこともありました。でも、今は違います。確かに美術館は専門家や美術愛好家の方にも利用していただいておりますが、美術館を訪れるのは初めてという人達も沢山おられます。館長が美術の専門家でないからこそ、一般の来館者と同じ目線でものが見られるのではないだろうか考えるようになってからは、俄然自信が湧いてきました。これまで担当の学芸員に任せきりにしていた美術品の展示などについても、積極的にアドバイスをしてくれるようになりました。

話は変わりますが、うつ病や自殺が増えている現代にあ

って、人々は心の癒しを求めています。スポーツをしたり映画を見てリフレッシュできる人はそれでよいのですが、心を癒すための手段が中々見つからないという人には、美術館で絵画などの美術品を鑑賞することをお勧めします。美術館というと、施設が立派で、高価な美術品を数多く収蔵している所というイメージを持つ人がおられるかも知れませんが、もちろん美術館としてはそれに越したことはないのですが、それが総てだとすれば、地方の小さな美術館が都会のそれに太刀打ちできるはずなど絶対にあり得ません。ゴッホやピカソといった有名な画家の絵でなくとも、自分に元気を与えてくれる絵はどこ美術館であっても必ず見つかるはずです。そういった意味でも、地域における美術館の存在意義はこれまでに以上に重要性を増しているものと言えます。

私は、一人でも多くの人に、美術館を訪れることにより元気になって帰っていただける、そのような地域に根差した美術館を目指していきたいと考えています。当美術館にとって長年の悲願であったエレベーターもようやく今年度中には設置される運びとなりました。よりよい環境のもとで皆様をお迎えしてまいりますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

「疾走する日本車(アート)」

—1960年代を主軸とする国産車の軌跡—

《イベント報告》

2月26日(金)から3月28日(日)まで開催された当館企画の全国巡回展「疾走する日本車(アート)」は、入場者が1万人以上の大ヒットとなりました。今回の展覧会開催にあたり、ポスターや図録、テレビCMまで一貫して監修いただいた本県出身のアートディレクター戸田正寿氏には心から感謝申し上げます。戸田氏には、3月21日(日)、「福井県のデザイン」というテーマで講演もいただいております。3月14日(日)の座談会には、木村一男氏[日産 シルビア(CSP311型)デザイナー]、上砂公昭氏[三菱 ギャランGTO-MR(A53C-GR型)デザイナー]、千葉匠氏[カーデザイン評論家]、甲賀精英樹氏[株式会社八重洲出版オールドタイマー編集部]に参集いただき、当時の苦労話等を語っていただきました。ところで、今回のイベントで、格別のサポートをいただいたのは、何といっても福井クラシックカー協会(代表:竹田優治氏)の皆さん方です。会期中のほとんどの日曜日と祝日に、ご自身が所有するクラシックカーを来館者に披露していただき、展覧会の演出に一役買ってくださいました。春とはいえ、館外はまだ余寒が身にしみるこの時期、長時間立ちずくめで本当にご苦勞様でした。今回、ご協力いただいた協会の会員の方々からコメントをいただきましたので簡単にご紹介します。(学芸員 西村直樹)



講演中の戸田正寿氏



竹田優治さん

◎竹田優治さん(福井市)

「疾走する日本車(アート)」展が大盛況のうちに終了しおめでとうございます。これまで、車のデザインが芸術的な感覚でスポットを受けることがなく残念に思っていたので、今回の展覧会はとても意義あるものだと感じました。また、私達のクラシックカーを沢山の皆様に触れていただき、スタッフの一員としては、感無量で、参加させていただいた甲斐があったと思っております。

◎江指靖範さん(越前市)

私がコスモスポーツに関心を寄せたのは、35年程前にマツダ系の販売店の整備工として勤めていた頃です。勤務先の会社で初めて見た時の感激からマツダが最初に出したコスモのクラシックカーに乗ってみたいという一心で、4年程前に手に入れた憧れの車です。

◎斉藤茂二さん(鯖江市)

昭和45年末に発売されたギャランGTO-MRは、斬新でスタイルがよく高性能でしたが、高価過ぎて当時は高値の花でした。この車は14年前によく夢が叶って購入したものです。今回のイベントで旧車に興味をもち、理解してもらえる人が増えたのではないかと喜んでます。



左は斉藤さんの《三菱 ギャランGTO-MR》、
右は江指さんの《マツダ コスモスポーツ》

所蔵品によるテーマ展

4/29(木)～5/30(日)

「岩佐又兵衛

～福井藩御用絵師の軌跡～」

6/4(金)～7/17(土)

「APECエネルギー大臣会記念

館蔵名品展 ～日本の美～」

4月29日(木)から5月30日(日)までテーマ展「岩佐又兵衛 ～福井藩御用絵師の軌跡～」を、6月4日(金)から7月17日(土)までテーマ展「APECエネルギー大臣会記念 館蔵名品展～日本の美～」を開催します。

「岩佐又兵衛」展では江戸時代初期に個性的な画風で京都・越前・江戸で活躍した絵師岩佐又兵衛(1578～1650)を特集します。中でも福井時代は福井藩の御用絵師としてその才能が大きく花開いたことでも知られています。本展では又兵衛福井時代の作品を中心に、その子勝重等の作品もあわせて展示紹介します。

「館蔵名品展」では当館所蔵の近代日本画を中心に紹介します。菱田春草の《落葉》は、いくつか現存する《落葉》の中でも文展に出品した《落葉》(重要文化財)に最も近似する作品で、春草生涯の傑作のひとつといえるものです。是非ご鑑賞ください。

帝国芸術院賞受賞者であり、歴史人物画の第一人者として名を馳せた日本画家・島田墨仙は慶応3（1867）年に福井藩士・島田雪谷の次男として福井城下に生まれました。父雪谷は福井藩の下級藩士でしたが、書画の才能に恵まれ、日々の役向きのほかに藩主松平春嶽公に書画の指南役として重用されました。絵心のある藩内の子弟も競ってその門に入り、幕末から明治初年にかけて一時は千を越す門弟を抱えたと伝えられています。そのなかには当時の福井の重要人物も含まれており、息子墨仙の成長に多大なる影響を及ぼします。

その筆頭に挙げられるのは幕末の志士・橋本左内です。島田家と橋本家は家が隣同士だったので、少年の左内はよく島田家に顔を出して8歳年上の雪谷から絵や書を習うのを楽しみにしていました。墨仙の生まれる8年前左内はすでに世を去っていましたが、島田家には左内の遺墨が数多く遺っていました。後に雪谷はそれらを見せながら「左内さんはお前の年にはこんなに立派な絵を描いて、その上この通り上手な養までしているのに、お前は悪戯遊びばかりしてどうするのだ」^{注1}と豊少年(墨仙)を戒めたということです。いかに「悪戯小僧で手がつけれなかった」豊少年とはいえそのような高尚な作品を見せられては反省せざるを得ず、左内に対してひそかに敬慕の念を抱くのでした。後に墨仙は橋本左内や藤田東湖、吉田松陰、佐久間象山などの幕末の志士たちの肖像を好んで描いていますが、それは幼い頃から聞き親しんだ隣家の偉人から受けた深い感銘とその時代への探究心の表れともいえるでしょう。

明治初期の西洋画家・小林寿、大平広正も雪谷から日本画を学んでおり、後に墨仙の師となります。墨仙は9歳頃から父雪谷に就いて絵を学び始めましたが、16歳で父を亡くしています。その後18歳で東京美術学校入学のため東京小石川植物園内の図画取調掛を訪ねますが、岡倉天心からまだ開校前であるから郷里で待つように言われ失意のうちに福井に戻ります。そのようなとき墨仙に絵を教えたのが上述した小林寿と大平広正の二人でした。小林は藩校「明新館」のアメリカ人教師グリフィスから図画を学び、大平は東京の彰枝堂で西洋画を本格的に学んでいました。彼らは墨仙の父から学んだことに対する恩返しの意味で、当時最先端の西洋画の技術を墨仙に教授し、19歳頃には本人の納得いくレベルにまで導きました。この二人の師が与えた西洋画の表現、正確な物の見方、特に人体骨格などの写実の知識は、日本画の非写実表現に慣れ切っていた墨仙にとって新鮮で大いに触発を受けるものでした。また、父亡き後の島田家では、2歳年上の兄雪湖^{雪湖}が、亡父の門弟を教えたり、新聞の挿絵描きをしたりして、生計を立てていました。苦勞している兄を助けたい一心の墨仙のために小林、大平の二人は墨仙が福井中学校^{注2}や福井高等女学校^{注3}で教職を得るよう尽力しました。

後に29歳で上京して橋本雅邦に入門し、日本画家・島田墨仙へと成長していく過程には、さらなる紆余曲折がありましたが、父雪谷が紡いでくれた福井の人々とのつながりが墨仙を常に励まし、支え続けてくれたのでした。（学芸員 佐々木美帆）

注1. 島田墨仙述「墨仙自叙伝(三)」『国画』第3巻第10号 昭和18年10月/注2. 『創立五十周年記念録 福井県立福井中学校』昭和6年10月
注3. 福井県立藤島高等学校(旧福井中学校)同窓会 社団法人明新会事務局より平成22年4月聞き取り調査

※福井県立美術館では、来年3月の企画展で島田墨仙を中心として父雪谷、兄雪湖を検証する展覧会を開催します。彼らの作品や情報をお持ちの方がおられましたら、当美術館の佐々木学芸員までご連絡ください。

福井県立美術館 夏の企画展案内

愛のヴィクトリアン・ジュエリー展

7月24日(土)～8月22日(日)



「若き日のヴィクトリア女王」
油彩・カンヴァス 1842年頃
F.X. ヴィンター・ハルター工房



「ピンクパールズ&カラーゴールドスウィート」
ゴールド・ピンクパールズ 1830年頃



「ターコイズ&ゴールドブローチ」
ゴールド・ターコイズ 1830年頃

19世紀イギリス。大英帝国はかつてない繁栄を迎えます。この「太陽の沈まぬ帝国」とよばれたイギリスを導いたのがヴィクトリア女王(1837～1901)です。ヴィクトリア女王はヨーロッパの女性たちが憧れるファッションリーダーであり、とりわけジュエリーの世界に注目すべき展開をもたらしました。

本展では、ヴィクトリア時代の豪華なジュエリーの数々と英国王室にまつわる宝飾品をご覧ください。あわせて当時のウェディングの装いや、アフタヌーンティーの豪華な銀器やテーブルセッティング、さらに細かな手仕事による優美なアンティーク・レースなど約300点によって華麗なる英国伝統文化の粋をご紹介します。

なお、福井県立美術館ボランティアの会では15周年記念事業として、子ども、親子が親しめる関連イベントの開催を予定しています。